

## 古きよき日の思い出（2）

半田侑子

2022年4月23日

### （第六段落）

しかしその頃の東京に暮していた私は、むろん他日アルジェリアで戦うだろうフランスを知らず、ヴェトナムで戦うだろう米国を知らなかった。私を知っていたのは、——いや、風のたよりに噂を聞いていたのは、《フロン・ポピュレール》のフランスと、《ニュー・ディール》の米国であった。「かしこには、ただ秩序と美と、栄耀と沈黙と自由」があり、身の廻りには、神がかりと混乱と、貧困と騒々しさと言論の徹底した不自由があるとしか思われなかった。たしかに私は、ニーベルンゲンの神話や、「血と土」の騒々しい宣伝や、ハイネを抹殺し、トマス・マンを追出そうとしていた国の言論の不自由を、いくらか知らないわけではなかった。しかしドイツは、フランスや米国が遠かったように、はるかに遠い国であった。

### （1） 初出との異同

・ニーベルンゲンの神話→初出ではニーベルンゲンの神がかり

### （2） Front Populaire（フロン・ポピュレール）…ファシズム勢力の台頭に抗し、戦争とファシズムに反対の全勢力と組織を結集した反ファシズム統一戦線。

フランスでは 1936 年の選挙で大勝し、レオン・ブルムを首相とする人民戦線内閣が成立したが 37 年経済危機を克服できず退陣。

### （3） New Deal ニュー・ディール（1933-35）…ルーズヴェルト大統領が実施した。恐慌克服政策、公共事業や失業対策を打ち出した。

### （4） 「かしこには、ただ秩序と美と、栄耀と沈黙と自由」

→ボードレール『悪の華』の「旅へのいざない」の一節

Là tout n'est qu'ordre et beauté,

Luxe, calme et volupté.

### （5） ニーベルンゲンの神話

→「ニーベルンゲンの歌」13 世紀に完成したブルグント族の大英雄叙事詩。民族移動期の史実や伝説に題材をとる。ワーグナーの『ニーベルンゲンの指輪』はこれを下敷きにしている。

### （6） 「血と土」→ナチスの農業大臣兼農民最高指導者リヒャルト・ワルター・ダレが普及させた言葉。彼の著書『血と土』の邦訳の序に有馬頼寧が 1940 年、次のような一

文を寄せている。「ナチス農業政策の真髓は実に本書にありといわれ、民族と国土との純粋さから指導者原理を打樹て、所謂第三帝国の建設に邁進せんとするドイツ帝国の理念と実践を組織したもので、新体制下祖国日本の真姿を権限し、臣道実践に挺身せんとするわれわれに、示唆し、裨益するところ甚大なるものがある」(『血と土』黒田礼二訳、春陽堂書店、1941、)

(7) ハイネ

「愛国心について」『夕陽妄語』(「自選集」第10巻所収)

「祖国への愛は情念である。自己批判は理性の働きである。理性的に統御されない情念は、しばしば自己陶醉を推し進めて、どこまで行くかわからない。愛国心は容易に排他的ナショナリズムになるだろう。その結果がどうなり得るかは、われわれのよく知るとおりである。ハイネは狂信的ナショナリズムへ向かったことがない。かれの知性は抒情詩の中へまで浸透し、常に鋭い皮肉となって生きていた。他方その祖国愛、または亡命地でこそ却って強められた愛国心が、彼の筆法を鈍化させたこともない」

(8) トマス・マンは保守的な非政治的生活から第一次世界大戦を経て転向し、反ファシズムの立場を貫き、38年にアメリカ亡命した。

(第七段落)

しかもこちら側では、熱狂的な「愛国者」たちが、彼らの宣伝のすべてを「日本的なもの」と結びつけていた。「神聖にして侵すべからざる」日本の天皇だけが、神々の子孫であり、その「言挙げせぬ」国では、そもそも言論の自由が必要ではないといわれた。富士山は「世界の人も仰ぎ視る」はずであり、帝国陸軍は「世界無敵」であるはずだった。四面楚歌のなかで昂揚された「愛国心」は、何ごとにつけても「世界一」を必要としていたが、その頃の日本には、数量的に比較して「世界一」といえるものがほとんどひとつもなかったので、比較できないものが、「世界一」である、と主張されていた。大和魂、古来の淳風美俗、家族国家の理想、天地自然の美、皇紀二千六百年……歴史的年代でさえも、日本での算え方は、世界中の習慣とはちがっていて、比較が困難なようにできていた。神武天皇が日本国を統一したのは、中国に早く諸子百家が栄え、北印度に原始仏教が興り、地中海で古代哲学が洗練されて後、何百年も経ってから後の話であってはならなかった。日本は漠然として天地創造と共に古く、漠然として「世界一」の国であるはずだった。そういう話をあまりたびたび聞かされたので、私は「日本的なもの」にうんざりし、「西洋的なもの」を理想化するようになった。その頃の私は西洋を見たこともなかったから、西洋を理想化することは容易であった。

(初出との異同) 変更なし

(1)「言挙げせぬ」国→「駒場」の「ノー文句」という相言葉が尊重され(…)」(新版 138 頁)

(2)「日本は漠然として天地創造と共に古く、漠然として「世界一」の国であるはずだった。」

→他国と容易に比較のできない年代感覚、数量化し比較ができない事柄に対して「世界一」と一番であることを主張する。

(3)「私は「日本的なもの」にうんざりし、「西洋的なもの」を理想化するようになった。その頃の私は西洋を見たこともなかったから、西洋を理想化することは容易であった。」

→「我々も亦我々のマンドリンを持っている」『1946 文学的考察』

祖国を誹謗する者はもとより卑劣であるが、徒らに祖国を讃美する者は、愚昧である。事実は直視しなければならず、日本の事実は、何ひとつとして、のどかなものはない。

観光日本は、しばらく措く。皇国日本のマンドリンは、万葉の精神、ものあわれと幽玄と武士道、少し無造作に云えば、西洋の物質文明に対する東洋の精神文明である。マンドリンの弾き手は、主に、国文学者から成る一隊であって、軍国主義政府の弾圧政策が、国内の凡ゆる文化を破壊し、一掃した戦前及び戦争中の精神的荒野に、賑々しく登場し、陰険に便乗し、盲目的に支配し、世の青年子女を毒して、その理性を麻痺させるために、狂信的で、煽情的な歌を、歌いつづけた。

(…)

日本には、独特の論理も、宗教も、法律も、経済も、なかったし、今でもないと云う明白な事実は、普く普及させて、信州の山の中にまで、徹底させなければならない。シナ至ヨーロッパの文化圏の中に包含される地方的文化が、日本の文化であって、陸軍が世界一流であると言う宣伝が誤りであった如く、『万葉』や『源氏』が、世界一流の文芸作品であると云う迷信も、誤りである。それを無暗に有難がり、プラトン Platon やガリレオ Galileo やカール・マルクス Karl Marx の天才に学ぼうとしないのは、民を愚昧にする封建的専制政治の陰謀に、己の魂を売り渡す所業とでも申す他はない。

(『加藤周一著作集』第八卷)

(第八段落)

「国民精神総動員」は、都会では、成功していた。小学生は往来の若い女たちに向って、「パーマネントはよしましょう」と唱い、大学に劣等感をもつ男たちは、電車のなかで、外国語の教科書を読んでいる大学生をみつけると、「この非常時に敵性語を読んでいる者がある、それでも日本人か」と大声で叫んだ。「パーマネント」とは、女の髪をちぢらせる風俗をいい、「敵性語」とは、横文字で書かれた言葉を総称するのである。そういうものは農村には普及していなかったし、農家の人々は、「国民」よりも村に、「精神」よりも自分たちの

畑に興味をもっていたから、「国民精神総動員」は農村では成功しなかった。しかし私は都会で暮っていた。制服、号令、七五調の標語、粗野な態度と不正確な言語、他人の私生活への干渉、英雄崇拜と豪傑笑い、「日本人」意識……私がそれらのものを嫌ったのは、軍国主義に批判的だったからではない。あらかじめそれらのものを嫌っていたから、私は軍国主義にも批判的になったのである。私は小学生のときから、制服を好まず、七五調の唱歌に閉口していた。中学生の頃から、英雄崇拜ではなくて、偶像破壊を、豪傑笑いではなくて、調刺家の諸譜を、好んでいた。朝から晩まで「日本人」を意識することはなかったし、またそうする必要を感じたこともなかった。制服を着て隊伍を組んで歩きながら、漠然とした雰囲気

(初出との異同) 変更なし

(1)「国民精神総動員」…1937年8月第1次近衛文麿内閣によって閣議決定された思想統制運動。同年7月7日に盧溝橋事件があり、日中戦争へなだれ込むなかでの実施だった。

(2)「農家の人々は、「国民」よりも村に、「精神」よりも自分たちの畑に興味をもっていたから、「国民精神総動員」は農村では成功しなかった。」

→抽象的・観念的な事柄よりも、目の前の具体的な事柄に興味を持つ農民の姿は、のちに加藤が『日本文学史序説』で述べる抽象よりも具体、生活や日常を描くことに美を発揮する土着的世界観の特徴に合致している。

(3)「制服、号令、七五調の標語、粗野な態度と不正確な言語、他人の私生活への干渉、英雄崇拜と豪傑笑い、「日本人」意識……私がそれらのものを嫌ったのは、軍国主義に批判的だったからではない。あらかじめそれらのものを嫌っていたから、私は軍国主義にも批判的になったのである。」

・「漠然とした雰囲気に陶酔するという考えは、私にはき気を催させた」

・「大きな理想がはじめにあったのではない」

①若き加藤の反軍国主義的態度はあらかじめ明確な理屈があったのではなく、「感覚」から出発していたものだった。

②「漠然」に対する批判

→第七段落「日本は漠然として天地創造と共に古く、漠然として「世界一」の国であるはずだった。」

(第九段落)

しかしなぜ、周囲におこりつつある出来事を、私は私なりに解釈し、批判しようとしたのであろうか。身の安全をはかるためには、徴兵検査について知る必要はあったかもしれないが「大東亜共栄圏」が実際には何を意味するかを知る必要はなかった。心の平静を保つため

には、死ぬ覚悟をする必要があったかもしれないが、そのためにはむしろ「聖戦」を信じていた方が都合がよかったにちがいない。また事態がさし迫って来るまでは、いくさを忘れて暮すこともできたはずである。女や、酒や、詩歌管弦や……

(初出との異同)

いくさを忘れて暮すこともできたはずである。一人の女に夢中になることは、しかるべき相手がなければできなかつたとしても、多くの青年たちがそうしていたように、

ヘルマン・ヘッセ Hermann Hesse や ハンス・カロッサ Hans Carossaの翻訳全集のなかに、童話じみた世界をもとめて、そこ

に安住の地を見出すこともできた。一体何のために、たとえ知っても決してその成りゆきに影響をあたえんとのできない真実を、私は知ろうとしていたのであろうか。そのために特別の情報をあつめたのではないし、情報を分析するとともに格別の注意を払っていたのでもない。

(1)「しかしなぜ、周囲におこりつつある出来事を、私は私なりに解釈し、批判しようとしたのであろうか。」

→身の安全をはかるためでもなく、心の平静を保つためでもない。むしろ、心の平静のためには、「聖戦」を信じるか、「いくさ」そのものを忘れて現実から逃避することもできたはずである。それにもかかわらず、なぜ加藤は解釈し、批判しようとしたのか。

(第十段落)

しかし私はいくさの性質を見きわめることに関心をもっていた。その関心が社会に対する責任感から来たのでないことは、たしかである。私はみずから何らの影響力も行使することのできない社会に対して、責任を感じてはいなかった。しかし社会に対する私の無力は、もちろん、社会の私に対する無力ではない。社会の進んでゆく道が、そのなかに情容赦なく私をまきこんでゆくだろうということに、疑いの余地はなかつたし、私は私にはたらきかけるものの全体を、理解したいと願っていたのであろう。中国との戦争は、道義上の罪悪であり、国際法上の侵略であり、戦略上のおそらく杜撰そのものだろう、と私は考えた。

(初出との異同)

社会の進んでゆく道が、(…)疑いの余地はなかつた。私は私にはたらきかけるものの全体を、理解したいと願っていたのかもしれない。しかし理解することは、すなわち批判することだ。中国との戦争は、(…)と私は考えていた。

(1)「しかし私はいくさの性質を見きわめることに関心をもっていた。」

→第九段落で述べられたように、いくさの性質をみきわめることに関心を持つ明確な理由はない。

(2)「その関心が社会に対する責任感から来たのでないことは、たしかである。私はみずから何らの影響力も行使することのできない社会に対して、責任を感じてはいなかった。しかし社会に対する私の無力は、もちろん、社会の私に対する無力ではない。社会の進んでゆ

く道が、そのなかに情容赦なく私をまきこんでゆくだらうということに、疑いの余地はなかったし、私は私にはたらきかけるものの全体を、理解したいと願っていたのであろう。」

→加藤は社会に対して無力であるが、社会のほうは加藤を情け容赦なく巻き込んでゆくことができる。加藤は自分が巻き込まれていくことを避けられないと自覚しており、それゆえに、自分の意志を無視して「はたらきかけるものの全体を、理解したいと願っていた」のだろう。

(3)「中国との戦争は、道義上の罪悪であり、国際法上の侵略であり、戦略上のおそらく杜撰そのものだろう、と私は考えた。」

→政府の発表と真っ向から対立する見解。

(第十一段落)

その頃私の見た夢は、もはや高熱にうなされた子供の頃の夢ではなかった。私を押しつぶそうとして迫ってきた巨大な車輪や、無限の深みへ引きずりこもうとした不気味な渦巻は、もはやそこにはなく、その代りに、私をとりまいて、警察の男たちが立っていた。夢のなかでの彼らは、私の考えのすみずみまで見透していて、勝ち誇ったうすら笑いをうかべながら、来るべき拷問の前味を愉しんでいるようにみえた。私は逃げ出す道のないことに絶望し、自分の考えは誤であったと告白して憐みを乞い、憐みを乞う私自身に愛想をつかし、しかしその場をきり抜けることに全力を注いで、もはや私自身の考えをほんとうに捨て去ってしまったということに、心の片すみでは、ほとんど肩の荷をおろした後のような安らぎさえも感じていた……しかし眼がさめた後で、私の考えは変らなかつた。

(初出との異同) 変更なし

(1)「巨大な車輪や、無限の深みへ引きずりこもうとした不気味な渦巻は、もはやそこにはなく、その代りに、私をとりまいて、警察の男たちが立っていた。」

→巨大な車輪、不気味な渦巻きは「優等生」のころの夢。

車輪も渦巻も「そのなかに情容赦なく私をまきこんでゆくだらう」ということの象徴ととれる。警察は「情容赦なく私をまきこんでゆく」ものが加藤に接触するときの現実的・具体的な存在。

(2)「私は逃げ出す道のないことに絶望し、自分の考えは誤であったと告白して憐みを乞い(…)」→加藤のありえたかもしれない姿。加藤は、警察の拷問に打ち勝つような「英雄豪傑」ではないという自覚があった、あるいはあったというように描いている。そして自らの平凡さ、弱さを夢の形を借りて吐露しつつ、拷問に耐えるような強さはないが、それでも「眼が覚めた後で私の考えは変わらなかつた」という。ありふれた人間が公権力に抗する時の恐怖を率直に描き、抵抗する側もまた、強い「英雄」を求めることへのアンチテーゼとも読める。加藤の「英雄崇拜ではなくて、偶像破壊を」(第八段落)の精神は、ここでも生きている。人間は弱く、日本は「世界一」である必要はない。たとえ暴力に脅されて憐れみを乞うたとしても、内心の自由を持ち続けあきらめないという姿勢が加藤周一ではないだろう

うか。

#### Cf.)丸山眞男の検挙経験

以下は2021年度第4回加藤周一現代思想研究センター・丸山眞男記念比較思想研究センター共同企画展示『知識人の自己形成 — 丸山眞男・加藤周一の出生から敗戦まで』のデジタル展示より抜粋。

一高の寮には共産党が浸透していたが、寮で丸山が検挙されることはなかった。しかし、2年次の終わりに唯物論研究会主催の長谷川如是閑の講演を聴きに行ったところ、逮捕拘禁されてしまう。講演会は開始とともに警察によって即刻中止となったが、会場で目をつけられていた丸山は退場の際に検挙され、本富士署に拘留されたのである。

留置場では収容者に無造作に振るわれる暴力を目の当たりにした。東大生や一高生に対するものはもっとも軽い部類だったが、独立運動に参加している朝鮮人は取り調べごとに半殺しの目にあっていた。丸山自身も暴力の対象となった。ドストエフスキー『作家の日記』の一文「わが信仰は〔神の存在に対する〕懐疑の坩堝の中で鍛えられた」から想を得て、日記帳に書き記していた「日本の国体は果たして懐疑の坩堝の中で鍛えられているであろうか」という文が、君主制を否定するものとして見咎められた。弁解しようとしたところ、有無を言わず殴られたのである。丸山は後年、明治憲法下の天皇制が「否定をくぐらない肯定」によって支持されたに過ぎないものであって、逆説的に脆弱であった証左としてこの出来事を回顧している。

検挙されたことは、丸山にとって自身の弱さを自覚する機会でもあった。

「初め一高のときつかまったときは、気持ちが動揺していたから。ぶん殴られたりするでしょう、だから留置場の中に入ってきて泣いたですよ。おれという人間はなんてだらしのない人間だと思ったね。」

「1月13日 丸山眞男先生速記録」

釈放後、1週間もしないうちに学校から呼び出されると、丸山は学校の幹部からクラスの思想傾向について尋問を受けた。思想統制を担う特別高等警察（特高）は学校と連絡をとっており、大学に入っても学生課から呼び出され、学生主事の説教を受けたという。以降、折に触れて特高に呼び出されるようになり、大学2年次には突然自宅に特高刑事が来たために検挙されていたことが母に知られてしまった。大学卒業後は助手に採用されて大学組織に守られるようになったが、今度は憲兵につきまといわれるようになり、簡閲点呼（現役を退いた在郷軍人や徴兵検査に合格しながら徴集されなかった者を対象とする）

の際には、一人残されて尋問されたという（この日だけは軍の指揮下に入るため）。敗戦後に特高と軍が解体されるまで、丸山は左翼組織に関わりがあるという疑いをかけられて思想犯予備軍のブラックリストに入れられ、継続的な監視の対象となった。

(<http://www.ritsumei.ac.jp/lib/f09/040/>)

(第十二段落)

私はいわゆる内幕話や、特別の情報と称するものを、好みもしなかったが、また知りもしなかった。「南京虐殺」のことさえ、私がそれを知ったのは、日本の軍国主義が崩れ去った一九四五年以後のことにすぎない。「南京虐殺」だけではなく、私はそのときまで、強制収容所や、ドレスデンや、広島で、何人の婦人・子供・非戦闘員が殺されたのかも、知らなかった。いや、最近になって、ある新聞記事を読むまでは、南ヴェトナムの子供たちがどれほど殺されたのかということも、ほとんど知らなかった。一九六一年から六六年まで、ナパームで爆撃された南ヴェトナムの村では二五万人の子供が死んだ」とその新聞の記事は報告していた「七五万人が手肢をもぎとられ、負傷し、火傷を負った……」（記事のもとになったのは、米国のカトリックの学校で、子供のための研究所を指導していた人のヴェトナム視察報告である。）そこに書かれていた数字は、正確ではなかったかもしれない。しかし故意に誇張されていたのではなかったろう。たとえ殺された子供が、二五万人ではなく、実は二〇万人であったとしても三〇万人であったとしても、そのことの意味には変りはない。それをどうすることも私にできない。とすれば、**なんのために**、遠い国のみたこともない子供たちのことを、私は気にするのであろうか。——その「**なんのために**」に、私はみずからうまい返答を見出すことができない。

(初出との異同)

- ① 「南京虐殺」だけではなく、(…) 何人の婦人・子供・非戦闘員が殺されたのかも、**全く**知らなかった。
- ② たとえ殺された子供が、(…) そのことの意味には変りはない、**と私は思った。問題は、**ヴェトナムの子供たちが、何年前に殺されたのではなく、**今でも殺されている**ということである。**それをどうすることも私にできない。それならば、なんのために(…)**

(1) 南京虐殺

南京虐殺についての加藤の意見

ユディット・ブランドナー氏によるオーストリアラジオ放送のインタビュー（原文はドイツ語、2004年6月東京でのインタビュー）より一部抜粋（半田訳）

日本は、世界で唯一、原爆の犠牲となった国であり、大規模な破壊を経験しました。日本は、加害国であり、また被害国でもある。このことは非常に具体的ですが、同時に非常に抽象的です。東京でもまた、非常に多くの人々が亡くなりました。何よりもまず、日



本人は被害者であるのみならず、加害者であった。そのひとつの象徴が南京です。(…)

特に 1990 年代、また 1980 年代にも、南京〔大虐殺〕を否定する言説が多くありました。南京での犯罪の存在を否定しようとした。しかし、この傾向は残念なことに 90 年代により強くなっています。この立場を代表するのが、東京の都知事、石原です。しかし、これは馬鹿げたことであるし、一つの象徴にすぎない。南京で何人の人が日本軍によって殺されたか、これは本質的な問題ではない。何人かは 1 万人だけだと言い、話の中で 10 万に変わったのだと言うが、しかし、数は重要ではない。武器も持たず、防衛能力もなく、無抵抗の人々が殺された、だから大量殺人〔大虐殺〕なのです。日本軍は日本国民を非常によく訓練し、普通の中国人や市民、女性や子供であっても殺すことができるよう教導した。そういう意味で南京は大量殺人の一つの象徴なのです。これは非常に残酷で、南京だけではなく、中国全体に関わる事件です。中国政府は犠牲者が二千万人にのぼると発表しました。私が強調したいのは、重要なことは、数や割合や統計ではない、数を数えることではなくて、南京が象徴していることです。これは組織的暴力による無抵抗の大衆に対する大量殺人です。そしてそれは犯罪です。

(2)「米国のカトリックの学校で、子供のための研究所を指導していた人のヴェトナム視察報告」→加藤がこの報告に触れた新聞記事がある。「欧州と日本(下) 「ベトナムの子を救え カトリック教徒の報告に思う」『毎日新聞』1967 年 1 月 11 日付夕刊(記事末尾には「ヴィーンで」と書かれる)

①「古きよき日の思い出」は初出が同年 2 月 26 日なので、同じような時期に書かれた可能性。

②記事の内容…小見出しは「米国の子供研究家が六週間視察」「広島悲惨に近づきつつある」「サルトル氏と知識人のこと」「一面は一致、他面で離れている」

(以下「米国の子供研究家が六週間視察」「広島悲惨に近づきつつある」の一部抜粋)

#### 「米国の子供研究家が六週間視察」

米国はニューヨーク州にカトリックの学校、マーシー・カレッジがあり、そこに子供に関する研究所があつて、研究所の所長がウィリアム・ペッパーという人である。そのペッパー氏が昨年春六週間ベトナムを視察して、その結果を米国のカトリック系月刊雑誌「ラムバート」(66.12)に発表した。私はいま欧州の客舎にいて「ラムバート」の原文を見ることできないが「ル・モンド」(66.12.23)がそれを紹介しているのを降誕祭の日に読んで、強い印象をうけた。1966 年の降誕祭を、私はおそらくただそのことのためにも記憶するだろう。そこに報告されている事実を確かめる手段は私にはない。しかしカトリックの米国人教育家が、反米宣伝の政治的目的のために故意にベトナムのいくさの悲惨さを誇張したろうとは、常識上考えにくい。とにかくペッパー氏が報告していると言われるのはつぎのようなことである。

### 「広島悲慘に近づきつつある」

1961年以來ベトナムでは、25万人の子供が殺され、75万以上の子供が、ナパーム弾のために負傷し、片輪になり、やけどを負った。61年以來のベトナムで殺された非戦闘員は、およそ41万5千人、ベトコン一人に対し六人の割合である。親を失った数千人の子供は、医療設備の全く不十分な環境のなかで、栄養失調、ペスト、コレラ、チフス、結核のために死にかかっていると訴えている。思うにベトナムの村落のナパーム爆撃は、いまや広島・長崎の原爆の悲慘に近づきつつあるといえるのではなかろうか。……

(3)「それをどうすることも私にできない」→第十段落では、1930年代に学生であり、無力であった加藤が描かれている。それからおよそ30年、加藤は状況を実際に左右することはできないが、しかし「私はみずから何らの影響力も行使することのできない社会に対して、責任を感じてはいなかった」という学生の頃とは違う。加藤は文筆活動を通して社会に対する影響力を持ったが、加藤によると、その機会は絶望的に少なかったという。

1945年から今日まで、私が影響力を持つ機会は絶望的に少なかった。私の最大の影響力を発揮する機会は、私が新聞に私の意見を述べることができるときです。私がさらに急進的になった場合、私はおそらく主要新聞に執筆する機会が失われる可能性があります。そうなれば、私の影響力は事実上ゼロです。私は大きな影響力は持っていませんが、しかしながら、主要メディアに発表することができるなら、いくらか影響力はある。その場合、〔謝礼は〕今の所、完全に無料とまではいきませんが、しかしかなりそれに近い。(前掲ユディット・ブランドナー氏のインタビューより抜粋)

(4)「なんのために」青春ノートⅧ「一九四一年十二月八日」

Enfin la guerre. Enfin chez nous. Voilà déclaration de la guerre de notre gouvernement. Qui a fait? et Pourquoi?

「ついに戦争だ、ついに僕らの国で。日本政府の宣戦布告があった。誰がしたのだ？なんのために？」

(『加藤周一 青春ノート—1937—1942』人文書院、2019、226頁)

「どうすることもできない」「なんのために、遠い国のみたこともない子供たちのことを、私は気にするのであろうか。——その「なんのために」に、私はみずからうまい返答を見出すことができない。」

→開戦の日も加藤は「なんのために」と日記に書いた。自分が「どうすることもできない」戦争に対して「なんのために」と問う加藤の姿勢は変わらない。この章でも、なぜ、なんのためにという問いが繰り返されるが、開戦の日と異なるのは、その「なんのために」が、自らに向けられている点である。「なんのために」、自分は遠い国の子供が殺されることを考え

るのか、加藤はその答えを見出すことができない。

(第十三段落)

新聞記事を読んだ日の夕方に、私は旧知の実業家とハンガリア料理の店で、夕食をしていた。それは中欧の古都で、葡萄酒はうまく、流しの音楽家の提琴は巧みであった。久しぶりで会った私たちは、飲食の評判をしたり、最近の下着の流行の話をしていた。(実業家の若い妻君は、そういうことに詳しかった。)私はそういう話が少しつついたところで、「どうも経済的繁栄の第一の徴候は、瑣末主義のようすな」といった。私はそれを、自ら嘲りながら、皮肉な冗談としていったのである。しかし実業家の妻君は、それを真面目な非難としてうけとったらしい。「それはどういう意味ですか」と彼女は笑わずに反問してきた。「ヴェトナム戦争の真最中に、私たちが出会って、流行の袖の長さが一糎長いか短いかという話をしているということですよ」と私は説明した。「いいじゃないか」と実業家はいった。「二五万人の子供が殺されている、という話を知っていますか」「ぼくは信じないね」「そう気軽にいいなさん」と私はいった、「そもそもあなたは、ヴェトナム戦争についてはどんな初歩的なことも知らないのでしょうか。交戦している一方の側の言分は漠然と知っていても、他方の側の言分は一度も読んだことさえない。ジュネーヴ協定の内容も、三国監視委員会の公式報告も見ることがない。それでは、私のいったことが、ありそうもない、と考える根拠もないでしょう。基礎資料を見もしないで、ぼくは信じない、などといっているから、あなた方は、ナチが何百万人も殺してしまった後になって、強制収容所と毒ガス室のことは知らなかった、といい出すのだ。彼らは知らなかったのではなく、知りたくなかったのだ。あなたは信じないのではなく、信じたくないのだ……」。

(初出との異同)

- ① 葡萄酒はうまく、<sup>チゴイネル・ムジーク</sup>Zigeunel-musikを奏する音楽家の提琴は巧みであった。
- ② 反問してきた。そうなる、私もまた、言いだしたときとはちがって、私自身の言葉を真面目に扱わざるをえない。「ヴェトナム戦争の真最中に、(…)
- ③ それでは、私のいったことが、ありそうもない、と考える根拠もないではないですか。根拠もないのに、他人の話をいきなり信じないというのは、でたらめすぎる。私は今いった程度、またはその何倍かの程度の基礎資料は、もちろん、読んだ上でいっているのだ。あなたの国語でそれが皆よめるかどうか知りません。しかし少くとも英仏語のどちらかで、手に入れることは困難でない。基礎資料を(…)あなた方は、SSが何百人も(…)

(1) 私はそういう話が少しつついたところで、「どうも経済的繁栄の第一の徴候は、瑣末主義のようすな」といった。私はそれを、自ら嘲りながら、皮肉な冗談としていったのである。

→・「瑣末主義」…「ヴェトナム戦争の真最中に、私たちが出会って、流行の袖の長さが

一糶長いか短いかという話をしている。」

・「自ら嘲りながら、皮肉な冗談としていった」→ヴェトナムで 25 万の子供が殺されている最中に、そのことには触れず、判断を下さず、社会全体の行先を考えずに、流行の袖の話をする。そのような日常に加藤もまた、身を置いているのだという自覚がある。

(2)「基礎資料を見もしないで、ぼくは信じない、などといっているから、あなた方は、ナチが何百万人も殺してしまった後になって、強制収容所と毒ガス室のことは知らなかった、といい出すのだ。彼らは知らなかったのではなく、知りたくなかったのだ。あなたは信じないのではなく、信じたくないのだ」

→作家の戦争責任に触れて「問題は知らなかったということではなくて、知ろうとしなかったことです」(『私にとっての 20 世紀』)

南京陥落に提灯行列した東京市民もいれば、日比谷公会堂でショパンを聞いて拍手をした聴衆もいました。その人たちは戦後になって「戦争のことは忘れた」という。そしてある作家は「何も知らされていなかった」と嘯く。

そうした作家の「騙されていた」という言葉を聞いたときは、責任逃れの言い草で大変不快感をもちました。ほんとに騙されていたのだとすれば、知らされていなかったということに対しては、限りない軽蔑を感じました。そういつている本人は有名な作家で、いろいろツテもあるでしょうし、新聞記者も知っている。また、知らなくても、聞こうと思えば、誰にでも会うことは容易でした。もちろん彼にとっては新聞社の外信部長などに会うことは可能です。

私など大学生が電話をかけて、いちいち会っていたら新聞記者は仕事にならないから、そういうことはできない。その私でさえ知っていたことを、その大作家が知らなかったというのは、知ろうとしなかったからだと思う。また新聞社の外信部などにいる人たちは、外国電報も読んでいるわけですから、戦況はどうなっているかということは知っていたはずで

問題は知らなかったということではなくて、知ろうとしなかったことです。公的な人間ならば、知る気がなかったということに責任を取れと批判した。

(加藤周一『私にとっての 20 世紀』、岩波書店、2000、pp.104-105)

(第十四段落)

「ぼくはそういうことを知りたくないね、平和にたのしんで暮したいのだ」とその実業家はいった、「知ったところで、どうしようもないじゃないか」——たしかに、どうしようもない。しかし「だから知りたくない」という人間と、「それでも知っていたい」という人間とがあるだろう。前者がまちがっているという理くつは、私にはない。ただ私は私自身が後者に属するということを感じるだけである。しかじかの理くつにもとづいて、はるかに遠い国の子供たちを気にしなければならぬということではない。彼らが気になると

いう事実がまずあって、私その事実から出発する、または少なくとも、出発することがある、ということにすぎない。二五万人の子供……役にたっても、たたなくても、そのこととは係りなく、そのときの私には、はるかな子供たちの死が気にかかっていた。全く何の役にもたたないのに、私はそのことで怒り、そのことで興奮する。……

(初出との異同)

- ① ただ私は私自身が後者に属するということを感じていた。
- ② はるかな子供たちの死が気にかかる。
- ③ そのことで興奮する。われわれが理くつにもとづいて、怒ることは決してないだろう。
- ④ 削除された最終段落

しかし怒りは、われわれの眼をさまさせることがある。私は三〇年代の末に不幸が近づいて来るのを知っていたし、太平洋のいくさが始まった日に、日本の敗れるだろうということも、確信していた。しかしもちろん、Cassandra のように両腕を天にさし出して叫びはしなかったし、また叫ぶこともできなかった。私は王家の娘ではなく、羊のような一人の学生にすぎなかった。したがって私の観察は、痛烈で無慈悲であった……

私は今そのことを暗澹とした気持ちで想出す。

(1) 実業家の「知ったところで、どうしようもないじゃないか」という態度と、加藤の「どうすることもできない」が「遠い国のみたこともない子供たちのこと」を「気にする」態度との対比。

(2) 「前者がまちがっているという理くつは、私にはない。ただ私は私自身が後者に属するということを感じるだけである。しかしかの理くつにもとづいて、はるかに遠い国の子供たちを気にしなければならぬということではない。彼らが気になるという事実がまずあって、私その事実から出発する、または少なくとも、出発することがある、ということにすぎない。」

①理くつではなく、役にたつかたたないかではない。

③ 彼らが気になるという事実がまずあって、私その事実から出発する

まあ、注釈すれば、知的活動は二つの要素からなっているのだと思います。一方には知的活動、論理、推論という仕事がある。それから情報の収集。データがあって、その分析と論理的な結果論があるということです。しかしそれが全部ではない。その知的活動を先へ進める、ある方角へ進めていく力は、知的能力じゃない。それは感情的な、一種の直感と結びついた感情的なものだと思います。

だから、例えばイラク戦争は、与えられた、手に入る限りの情報を集めてそれを整理し、分析し、推論して、その結果として反対するのじゃないと思います。しばしばデータが充分なかったり、情報が操作されていたり、いろんな障害があって、戦争については情報がそろっていないことがない。議論には想像も入ってくるはずでしょう。もし純粋に知的な立

場だけから見れば、論者がアカデミックな意味で厳密な姿勢を保とうと思えば、何も言えないということになってしまう。殊に学者の専門が分化していて、例えばヴェトナム戦争でもイラク戦争でも、国際関係の問題でもあり、国内政治の問題でもあり、戦争技術や経済的なインプリケーションズの問題でもあるので、専門領域から踏み出さずに戦争への賛否を言えないということになります。しかし経済学者も経済的な面だけからイラク問題を考えるというわけにはいかない。

イラク征伐に、日本は介入すべきかそうすべきでないかという問題は、純粋に政治学の問題ではないし、純粋に経済的問題でもない、いわんや純粋に戦争技術的問題じゃないわけですから、その反対も賛成も、そもそも知的推理を先に進めていく原動力も、実は知的なものではなくて、人間的な感情です。必要なのは感情と知力の両方です。

ところがその感情が麻痺した。日本で。だから何にも出てこないのだと思います。こういう面もあり、ああいう面もあり、だからどうするのか、何にも出てこない。いくら頭がよくてもそれでは駄目なんで、目の前で子どもを殺されたら、怒る能力がなければなりません。もしそれが平気で見てられ人だったら、頭がいくらよくても、駄目です。

(加藤周一・寺島実郎対談「迷走する日本」『加藤周一対話集5 歴史の分岐点に立って』かもがわ出版、2005、152-153頁)

以上